公園のルール看板

飯田理一朗

46歳、4児を子育て中の父親です。常日頃、子ども達には固定観念にとらわれず、多角的な視野で、未来へ意思を持って歩んでほしいと考えています。

先日の本紙でローカルマーケットというイベントが市内各所の公園等で開催されていることを知り、素晴らしいなと感じていました。主催者、協力者それぞれの身の丈でできることを持ち寄る。公園に笑顔があふれ、分かち合っている姿が紙面から想像でき、幸せな感情を抱きました。

何でもできる公園。コモン（共有地）のあるべき姿として理想的な形だと私は感じます。ただ、その実現にはコモンにおける滞在者の規範的な行動が求められます。それを表現したものが「公園のルール看板」だと思います。

以前、公園で看板を眺めていて、「○○禁止」「～してはいけません」など、バツの付いたイラストが溢れていて胸にモヤモヤしたものを感じていました。その頃でしょうか。ある男性から、原の浅間神社入り口に高札場を復活させたいので、設計と見積もりをしてほしいと依頼を受けました。

高札場というものを知らなかったですし、雲をつかむような話でしたが、その男性の熱意と、単純に面白そうな話だと感じ、引き受けました。設計図と見積書が完成し、男性に渡したところ、有志を募って実現したいとおっしゃって持ち帰られました。

現在ならクラウドファンディングが一般化していますので、もっと早くこのような仕組みが普及していれば、流れは変わっていたかもと当時を振り返って感じます。

高札場の設計を通じて様々なことが勉強になりました。高札のサイズや掲げられていた高さなどから調べ始め、当時の地元の先輩方は、どんなふうに高札を眺めていたのか、現代なら、どんな高札を掲げるのか、想像を膨らませていきました。

いろいろ調べていく中で気付いたのは高札の内容には禁止令が多かったということ。なるほど、公園のルール看板の原点はここにあるのだなと、その時、結び付いたのでした。

そして、それと同時に新たな疑問が浮かびます。「地元の先輩方は、どんな心持ちで、これらの否定文を眺めていたのだろうか」

日本は自己肯定感が低い国だと言われています。様々な要因が考えられると思いますが、その一つに、内省的自省的なふるまいを是とする儒教や仏教といった東洋思想が、言語を通して他者を感化させるにとどまらず、いわば他省を求めてしまっていることへの影響が大きいと感じています。

「～してはいけません」、そのような否定的な言葉が溢れていては自己肯定感は、なかなか上がりません。様々な自然災害や困難を、この地で乗り越えてきた先輩方は、どのような心持ちで生きてこられたのか。この疑問の解決口は、意外なところにありました。

時間と記憶について調べていた頃、時間の存在は疑わしいということを知ると同時に、ある文章が私の目に飛び込んで来ました。「江戸時代以前の日本人は、時間は未来から過去へ流れていると感じていた」

その文章の真偽を確かめるべく深掘りすると、江戸時代の和時計に、その痕跡を見つけることができました。資料を読むと、江戸時代初期の和時計は指針が静止し、文字盤が回転すると書かれています。その和時計が動く姿を想像してみて下さい。次の時間がどんどん指針にやってくる。「時間は未来から過去へ流れていく」

確かに、この感覚がなければ、こういった時計は作らないですし、この時計を眺めていれば、そういう感覚が育まれていくであろうと想像がつきました。

「時間は未来から過去へ流れている」

この感覚を持ったうえで高札を眺めたらどうでしょうか。私は未来へ踏み出しやすいと感じました。未来は、どんどんやってくる。行動を起こさなければならないのに対し、できないことだけ分かっていれば、それ以外は行動して良いと判断し、先へ進めます。

逆を言えば、できることが並んでいては、どれを選択して良いか迷います。高札に書かれていないことはできるのだろうか。迫ってくる未来に対し、一歩に躊躇（ちゅうちょ）が生まれやすいかもしれません。否定文にあふれた高札は先輩方にとっては、むしろ生きやすくしてくれる指標だったのです。

私達現代人は西洋思想の影響を大きく受け、いつの間にか時間は過去から未来へ流れているという感覚が当たり前だと感じるようになりました。そういった固定観念が現代の私達を苦しめているかもしれません。公園というコモンにあるルール看板の、表面上の文章の行間に先輩方の未来へ生きる知恵が隠されている。

そんな感覚を感受しながら、現代人の我々が公園で時間を過ごせたら素晴らしいなと感じています。

来たる10月30日（日）午前11時より沼津港近くにありますコモン、港口公園で杉原千畝・幸子夫妻顕彰碑・碑前祭「命のビザ希望の集い」が開催されます。平和な未来を願い行動した杉原夫妻の気持ちに寄り添い沼津の地から多くの方々と人道を伴った平和な世界の実現を願えたらと考えています。

ご賛同頂く多くの方に足を運んでいただけたら幸いです。

（原町中）

ナイチンゲールの言葉を述べる

同美術館では、これまで「備前焼」「志野焼」「青磁」「白磁」「色絵磁器」など多くの表現様式を残していった作家その人にも興味をそそられる企画。

「模倣と創造」が一大テーマとも言えくる」といった、ルールを外れた、やきものの美を追求する創造へと発展していった。

日本古陶磁に始まる時代を追った順路を辿っていくと、作品の変化だけでなく作家の意図するものをつい探りたくなるのも鑑賞の面白さ。

植松弘行館長が「茶壺の真打」と絶賛する江戸中期の星野焼、常滑再興の祖で幻の人間国宝と言

墓石・各種石材工事一式・設計施工
沼津